

巻頭言 ライフワークとしての研究への道のり

私は30歳を過ぎて言語聴覚士を志した。口蓋裂の言語臨床を学ぶため京都大学耳鼻咽喉科学教室の研究生になり、臨床経験を積みながら研究の補助をさせていただいたのが研究生生活のスタートである。当時、京都大学には音声科学研究所（音研）があり、形成外科教授の一色信彦先生、耳鼻咽喉科教授の本庄巖先生、教養学部発達心理学の中島誠教授、耳鼻科言語外来の川野通夫先生を中心として、学際的な研究がアクティブに展開されていた。音研には学歴も経歴も様々な研究生が言語聴覚障害を学ぶために集まっており、なりふり構わず寝食を忘れて（深酒は忘れないで）研究に取り組んでいた。

2年後、大阪府済生会中津病院に勤務することになった。上司の形成外科医長平本道昭先生はやはり京大出身で、毎年、口蓋裂学会と音声言語医学会では必ず発表し、論文を一本書くというノルマを課せられた。当時は子育て真っ最中で、家庭も仕事も研究も中途半端だと苦しんだ時期もあった。しかし、臨床データをじっくり検討しまとめていく作業は、忙中唯一自分に向き合える時間であり、次第に楽しみになっていった。1995年1月17日午前5:46阪神大震災が起こった時、大阪の自宅で大きな揺れに慄きながら私が最初にとった行動は、コンピュータのデータを保存することだった。

最初のうちは論文を病院の紀要に出していたが、やはり全国誌に投稿しないと読んでももらえないし業績にならないと気付いた。次に国際学会で発表するようになると、論文は英語で書かないと読んでももらえないという当たり前のことに気付いた。海外のジャーナルに投稿すると、その査読の緻密さ迅速さに圧倒される思いだった。論文を修正してなんとか期限までに返答すると直ぐに第二回目の査読結果が届く。査読者との真剣勝負である。明確かつ論理的に書かなければならない科学論文には、日本語より英語のほうが向いている。

済生会病院に14年間勤務したのち、広島大学病院に転勤し、同時に広島大学大学院医歯薬学総合研究科に入学した。すでに50歳を超えていた。博士論文で取り組んだエレクトロパラトグラフィ（EPG）を用いた構音障害の評価や訓練に関する研究は、山本歯科医院院長の山本一郎先生とともにライフワークとして現在も継続している。年々仕事量が増え、集中して論文に取り組める時間を確保出来なくなってきたが、中断している研究や手つかずの膨大なデータがある。宝の持ち腐れにならないよう、気持ちを引き締めて取り組んでいきたい。

リハビリテーション学部言語聴覚学科 教授 藤原 百合